

二〇二四年度法科大学院入学試験問題

小論文

注意事項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙は一枚配付します。
- III 解答にあたっては、黒インクのボールペンまたは万年筆のいずれかを使用してください（ただし、インクがプラスチック製消しゴムで消せないものに限ります）。それ以外で解答用紙に記入した場合は、無効とします。また、解答用紙欄外へ記入されているものは採点の対象としません。
- IV 解答を訂正するときは、訂正部分が数行にわたる場合は斜線で、一行の場合には横線で消して、その次のマス目から書き直してください（余白には書かないで下さい）。修正液・修正テープを使用してはいけません。
- V 解答は横書きで記入してください。
- VI 試験時間は六〇分です。
- VII 問題は七ページで一問です。

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

功利主義について説明する前に、問題を出してみよう。以下のケースについて、あなたならどのような判断をするだろうか。

〈中略〉

J・K・ローリングのケース…火事の建物から一人しか助け出せない場合に、あなたの父であるウェイターか、『ハリー・ポッター』シリーズを構想中のJ・K・ローリングのいずれかしか助けられない場合に、あなたはどうすべきか。

功利主義は、こうした問いに対して答えを与えようとする倫理理論の一つだ。功利主義はジェレミー・ベンタム（一七四八―一八三二）が最初に定式化した倫理思想である。彼は政治においても道徳においても、何をなすべきかを考えるさいに指針となるのは、「功利性の原理」を置いて他にないと主張した。彼の考えを一言で言えば、「最大多数の最大幸福」を指針として行なせよ、というものだ。ベンタムの名著『道徳および立法の諸原理序説』の第一章の冒頭にあるのは、「自然は人間を、苦痛と快楽という二人の王の支配の下に置いた」という有名な文章だ。ベンタムは、われわれ人間がなすべきことと、現実にするには、すべて快と苦という「二人の王」によって決められると言う。

自然は人間を、苦痛と快楽という二人の王の支配の下に置いた。彼ら苦痛と快楽だけが、われわれのすべきことを指示し、かつわれわれのすることを決定するのだ。その玉座には、一方には正・不正の基準が結わえられ、もう一方には、原因と結果の鎖が結わえられている。彼らは、われわれのすること、言うこと、考えること全てにおいて、われわれを支配している。われわれがこの服従から逃れようといくらあがいたところで、結局それは、われわれが彼らに服従して

いることを証明し、確かめるのに役立つに過ぎないだろう。

〈中略〉

功利主義の特徴を説明しておこう。より形式的にその特徴を列挙すると次のようになる。

(1) 帰結主義。行為の正しさを評価するには、行為の帰結を評価することが重要である。「帰結」とは結果のことだが、「結果主義」と書かないのは、功利主義はいわゆる「結果論」ではないからだ。「何にせよ結果がよかったのだから、その行為は正しかったのだ」と行為を事後的に評価するのが結果論だ。それに対して帰結主義は通常、「こう行為すると、こういうことが結果として起きるだろう」という事前の予測に基づいて、行為の正しさを評価するものである。

帰結主義は一見当たり前のことを言っているようだが、実はそうではない。行為の正しさは必ずしも帰結のみによっては決まらないという立場を、非帰結主義と呼ぶが、この立場に入る考え方はいくつもある。たとえば、ベンタムが「共感と反感の原理」について述べたように、倫理に関して「自分が好きかどうか」や「自然と感じるかどうか」で判断することもしばしばある。また、行為が正しいかどうかは動機の良し悪しで決まると考えている人も多いかもしれない。さらに、帰結がどうあれ各人の権利を守ることが重要という考え方もある。これらの立場は、行為の正しさを評価するさいには帰結とは独立の考慮が必要だと考えている点で、帰結主義とは区別されるものである。

(2) 幸福主義。行為の帰結といってもいろいろありうるが、行為が人々の幸福に与える影響こそが倫理的に重要な帰結であると考ええる立場が、幸福主義だ。ベンタムはいわゆる快樂説を取っているが、これは幸福主義の一種だ。快樂説によれば、快が善いものであり、苦は悪いものである。したがって、快樂を増やし、苦痛を減らすような行為が正しいことになる。あの章で見えるように、他にも、幸福とは欲求が満たされることとする説や、教育や健康などの客観的な利益を保障することだといった説もある。こうした幸福主義は厚生主義とか福利主義と呼ばれることもある。

幸福主義も一見当たり前のことを言っているようだが、必ずしもそうとは言えない。たとえばわれわれは自由や真理にも

価値があると考えているだろう。幸福主義は、それらに一定の価値は認めるものの、自由や真理に価値があるのは、それらが人々の幸福を増進するからに他ならないと考える。何かの役に立つという理由からではなく、それ自体に価値があることを「内在的価値」と呼ぶが、幸福主義によれば、この世界で内在的価値を持つのは幸福だけであり、それ以外のものは幸福になるための手段として道具的価値を持つに過ぎない。この立場を取らず、自由や真理は人々の幸福とは独立に価値を持つと主張するならば、それは非幸福主義である。

(3) 総和最大化。功利主義では、一個人の幸福を最大化することを考えるのではなく、人々の幸福を総和、つまり足し算して、それが最大になるように努める必要がある。そのさい、「各人を一人として数え、誰もそれ以上には数えない」(ベントム)ことが大切だ。つまり、一人一人が等しい配慮を受けなければならない。

総和最大化という特徴から明らかのように、功利主義は自分の利益を最大化するという利己主義ではない。また、一人を一人として数えるという公平性の配慮が働いているため、社会の一部の人の幸福を二倍に考えたり、他の一部の人の幸福を二分の一で数えたりすることもない。総和最大化という特徴に対しては、「功利主義には分配的正義の配慮がない」という重要な批判があるのだが、これは別のところで扱うことにして、先に進むことにしよう。

ここまで見てきたように、功利主義は一見して実用性が高く魅力的な思想のように思われる。しかし、功利主義に対しては、早くから手厳しい批判が加えられてきた。その批判とは簡単に言えば、功利主義は大勢の人を幸福にするという錦の御旗はたを振りかざすことで、「無実の人を殺さない」とか「約束を破らない」とか「家族を大事にする」といった人間の基本的な義務をないがしろにしているというものだ。

ジョニー・デップとウイノナ・ライダー主演の『シザーハンズ』というファンタジー映画をご存じだろうか。ジョニー・デップが演じるエドワード青年はフランケンシュタイン博士が作ったような人造人間で、タイトルにあるように、両腕にはふつうの手ではなく、大きなハサミ(シザー)がいくつも付いている。彼は自分を造った「父親」を不慮の事故で失ったのち、さびれた屋敷で孤独に暮らしていた。一方、ウイノナ・ライダーが演じるキムは典型的なアメリカの中流家庭で育った

白人の高校生だ。

ある日、化粧品品の訪問販売員をしているキムの母親が屋敷を訪れ、エドワードを発見する。彼女は身よりのないエドワードを不憫に思い、自分の家に引き取って一緒に暮らすことにした。しかし、社会生活を営んだことのないエドワードは、子どものように純粋な心を持つ半面、何をしてよくて何をしてはいけないのか、つまり倫理のルールがわかっていない。そのため、知らず知らずのうちに犯罪行為の手助けをするなど、さまざまトラブルに巻き込まれてしまう。エドワードの今後を心配したキムの父親は、一家での夕食中に、エドワードに次のように言う。

よし、ちょっと倫理の勉強だ。君が道を歩いているとする。するとスーツケースいっぱい詰まった札束が落ちているのに気づく。君は一人きりで、あたりには誰もいない。さて、君はどうすべきだろう？ A. お金を自分のものにする。 B. そのお金で友人や大切な人にプレゼントを買う。 C. 貧しい人にあげる。 D. 警察に届ける。

〈中略〉

現代の功利主義は、二つの点で洗練されている。

一つは、功利主義的に行為するために、ひたすら最大多数の最大幸福のことばかり考えて行為する「功利主義マシン」になる必要はないとする点だ。現代の功利主義者の多くは、家族への義務や、さまざまな道徳的規則を考慮しながら行為していれば、人々は結果的に功利主義的に行為することになる、と考えている。

かつてベントムの弟子の一人のジョン・オースティン（一七九〇—一八五九）という功利主義者は、この考えを次のように表現した。「健全で正統な功利主義者は、《彼氏が彼女にキスするさいには公共の福祉について考えていなければならない》などと主張したことも考えたこともない」。

功利主義者は年がら年じゅう、功利原理を用いて意思決定する必要はないとするこの考え方は、現在では「間接功利主

義」と呼ばれる。それに対して、ゴドウィンは少なくとも最初のうちは、立派な功利主義者は最大多数の最大幸福について始終考えていなければならないと考えていたので「直接功利主義」の立場を取っていたと言える。初期のゴドウィンに言わせれば、恋人同士がキスする場合も、社会の幸福を考えてそうしなければならぬのだ。読者も試しに二、三日やってみるとよいが、この立場を貫いて生きるのは相当大変である。

もう一つは、約束を守るとか嘘をつかないという義務の重要性は認めながらも、そうした義務を守ることが行き過ぎることがないように、功利主義の観点からチェックする必要がある、という立場を取っている点だ。このような、さまざまな道徳的規則や義務を守ることが社会全体の幸福に貢献するかどうかを評価し、貢献すると認められる規則や義務を二次的な規則として採用するという立場を、「規則功利主義」と呼ぶ。これらの規則や義務を「二次的」と呼ぶのは、功利原理という「第一原理」から派生するものと見なされるためである。これに対して、初期のゴドウィンやスマートは、道徳的規則や義務をあまり重視せず、あくまで個々の行為に対して功利主義的な評価を下さなければならないと考えていた。この立場は「行為功利主義」と呼ばれる。

ベンタムの弟子の一人であるJ・S・ミルのいわゆる他者危害原則は、規則功利主義者が支持する「二次的な規則」として理解することができる。他者危害原則とは、ミルが『自由論』で定式化した、次のような自由主義の大原則のことだ。

各人は他人に危害を与えないかぎり自由に行為することを許されるべきであり、たとえ他の人がある行為をすることが当人のためになると思っただからといって、それを当人の意思に反して押しつけることは許されない。

ミルはこのように述べ、個人の言論の自由や行動の自由を擁護した。一見すると、ミルは個人の自由を何よりも重視しているように思われる。これは、社会全体の幸福の増大を目指す功利主義の理念から逸脱しているように見えるかもしれない。行為功利主義者であれば、個々のケースを功利主義的に判断した場合、個人の自由を制限した方が社会全体の幸福にとってはよいこともあると主張するだろう。しかしミルは、そのようには考えなかった。むしろ、他人に危害を与えないかぎりに

において個人の自由を保障するという規則を社会が採用した方が、個人の自由に絶えず介入しようとする社会よりも、長い目で見ると全体として大きな幸福が得られると考えたのだ。

二次的規則を重視するこの考え方は、ミルの『功利主義論』でも詳しく論じられている。つまり、ミルが考えていたのは、功利原理そのものを個々のケースに当てはめて考えるというよりは、功利主義の精神に則った道徳規則や法律を作るということが念頭にあったということだ。

〔見玉聡『功利主義入門——はじめての倫理学』（筑摩書房、2022年）より〕



〔問〕 課題文を読んで、(1) J・Kローリングのケースについて、功利主義の立場によると、どのような結論が導かれるか、また、(2) 功利主義の考え方を参考として、キムの父親のエドワードに対する問いかけについて、あなたがエドワードであったならば、どのように答えるかを検討しなさい。(合計八〇〇字以内)